

## 原著

# 1896(明治29)年明治三陸海嘯における 日本赤十字社の救護活動

## ー岩手県における医療救護に焦点を当ててー

川原 由佳里\*

### 要 約

本研究の目的は、1896(明治29)年明治三陸海嘯における岩手県の医療救護と日本赤十字社の活動を明らかにすることである。岩手県の沿岸のほぼ全域が甚大な被害を受けたこと、もともと少なかった医療資源も壊滅的な被害を受けたことにより、初期医療は困難を極めた。通信が断絶し、交通の不便から外部からの支援も迅速には行われにくい状況にあったが、被災地には第二師団及び陸軍軍医学会の軍医・看病人、帝国大学医科大学附属病院の医員、第二高等学校医学部教員・学生、篤志の開業医・看護婦・人などが出張し、救護にあたった。日本赤十字社は4年前の1892(明治25)年に災害救護を戦時救護に並ぶ社の事業とし、本災害でもいち早く被災地に救護員を派遣して、宮古地方以北の不便な地を担当した。救護活動では濃尾震災と同様、隣接する県の支部が被災地の活動を支援、派遣医員は現地の開業医に対する教育を行って現地医療の復興を促したが、本災害では関係機関から災害救護団体として認識され、活動したこと、教育を受けた看護婦が現地の篤志看護婦に対する教育を行ったことが特徴的であった。

キーワード：日本赤十字社、明治29年、三陸海嘯、三陸津波、災害医療、災害看護

### はじめに

日本赤十字社は、1888(明治21)年の磐梯山噴火に始まり、1890(明治23)年トルコ軍艦海難事件、1891(明治24)年濃尾震災での救護実績をふまえ、1892(明治25)年には社則第4条の改定、すなわち従来の戦時救護に加え、臨時天災の場合の負傷者救護を兼ねて行うという改定により、災害救護を社の正式な事業として認めた<sup>1)</sup>。

この改定の後、日本赤十字社は1894(明治27)年6月に発生した東京での地震に際し、渋谷の日本赤十字社病院に数名の負傷者を収容し、治療看護を行った。また同年10月に山形で庄内地震(推定M7.0)が発生した折には、県に救護員派遣を申し出たが、時局(日清戦争)を鑑み、謝辞された。そのため1896(明治29)年6月15日に発生した明治三陸海嘯<sup>かいしやう</sup>(以下、三陸津波とする)が社則改定以来、初の大規模災害での救護活動となった。

本研究の目的は、1896(明治29)年の三陸津波における岩手県での救護活動の実際と同社がそれまでの災害

\* 日本赤十字看護大学

救護活動を通じて得た経験知を明らかにすることである。日本赤十字社の災害救護に関する研究は、これまで救護成績を概括して紹介するもの(黒澤2009、中央防災会議2005、2006)が多く<sup>2), 3), 4)</sup>、関係文書を広く検討し、当時の時代的背景のもとに同社の活動を評価したものは見当たらない。

筆者はこれまでの研究を通じて、1888(明治21)年の磐梯山噴火<sup>5)</sup>、1890(明治23)年のトルコ軍艦海難事件<sup>6)</sup>における日本赤十字社の災害救護活動については、いずれも天皇皇后の御内意により迅速に救護員を派遣し、監督省である宮内省の指揮のもと、政府や地方長官と協調して現地の医療を支え、救護活動を行ったことを明らかにした。また1891(明治24)年の濃尾震災<sup>7, 8)</sup>では、被災地の知事の要請に応じて救護員を派遣、近隣する日本赤十字社の地方支部の助けを得て大規模な活動を展開したこと、また現地医療の復興に向けた支援が行われたことなどの特徴を明らかにした。またこれらの災害を通じて認識された医療上の問題、そして被災地の県病院やキリスト教系病院の看護婦、日本赤十字社や東京慈恵医院などの養成を受けた看護婦たちの活動を明らかにしてきた。

一方、1896(明治29)年の三陸津波については、細越<sup>9)</sup>が岩手県気仙郡に設置された仮設治療所における日本赤十字社の看護活動について発表しているが、気仙郡以外の地における医療上の問題や看護婦・看護人の活躍、それらの活動に影響を及ぼしたであろう日本赤十字社本社支部(委員部)や関係機関との関係、岩手県での救護を通じて日本赤十字社が学んだ経験的知識については明らかにされていない。

本稿では、1896(明治29)年の三陸津波における岩手県の医療救護と日本赤十字社の活動について検討する。なお明治三陸津波は北海道から宮城県にかけての沿岸の広い範囲に被害をもたらしたが、岩手県では沿岸全

域が被害にあった上、従来、医療資源が多くなかったために、もともと医療資源が存在した宮城や被害地域が限られていた青森や北海道と違って、救護は困難を極めた。以下では、岩手県における津波の被害、政府と県の災害対応、各地域での災害医療の実際、そして日本赤十字社の活動と果たした役割、この災害を通じて得られた経験的知識について述べる。

## 1. 津波による被害

1896(明治29)年6月15日、旧暦の5月5日の午後7時32分に緩やかな地震が発生した。この時刻、現地では端午の節句のお祝いなどが行われていた。地震それ自体は現在の震度にして2, 3程度の小さなもので、人々はさして気に留めなかったが、この約30分後に巨大な津波が不意に来襲、わが国の津波災害史上最大の2万2千人に上る死者を出した(表1参照)。なお北海道の被害は家屋の破壊24戸、死者5名であった。

人的被害では負傷者より死者のほうが圧倒的に多かった。負傷者は全身泥、垢、乾いた血液等にまみれ、創は炎症を起こし、膿が溜まり、臭気が強かった。処置がなされている場合でも、包帯材料が不足していた時期に行われたため、創に綿沙片、綿花片を貼って木綿で結んでいるか、あるいは膏薬を貼用する程度で、周囲に蜂窩織炎を併発しているものが多かった。負傷後も奔走して働いていたため創部の安静が保てず、あるいは負傷部を緊縛したことで血行が鬱滞し、腫脹を促進したものと考えられた。

表1. 津波被害人口及び戸数<sup>10)</sup>

|    | 人 口    |       | 家 屋   |      |      |      |
|----|--------|-------|-------|------|------|------|
|    | 死 者    | 負傷者   | 流 失   | 全 潰  | 半 潰  | 破 損  |
| 岩手 | 18158人 | 2943人 | 4744戸 | 544戸 | 370戸 | 0戸   |
| 宮城 | 3452人  | 742人  | 954戸  | 164戸 | 264戸 | 未詳   |
| 青森 | 299人   | 214人  | 351戸  | 29戸  | 24戸  | 135戸 |

内科的疾患としては、溺水による嚥下性肺炎や胃腸炎が多かった。特に嚥下性肺炎は劇症で、悪感戦慄に始まり、外科患者を凌ぐ高熱が持続し、呼吸逼迫、脈拍微弱となり、数時間にして死亡するケースが多々見られた。この場合、治療はほとんど無効だった。

患者のなかには手術を恐れて自分自身や家族の創傷を隠蔽するものなどがおり、災害発生直後は生き延びても、治療が行われず死亡するもの、幸いに死を免れても一生障害が残るものもあった<sup>11)</sup>。

## 2. 政府・地方による災害対応

### 1) 災害通報

岩手県沿岸には電信線が設置されていたが津波によりことごとく破損し、音信不通となった<sup>12)</sup>。沿岸地区からの県への第一報は、16日午後4時20分遠野発の釜石情報であった。同日午後6時40分に県から中央政府に第一報が送られたが、その時点ではまだ被害の全貌は明らかではなかった<sup>13)</sup>。翌17日の午後8時50分になってようやく、県から内務省に宛てて、沿海一帯の被害状況が報告された<sup>14)</sup>。岩手県では被害の概略が明らかになるまでに2日を要した。

### 2) 政府の対応

内務省は17日夜に参事官2名を派遣、宮内省は21日に東園基愛侍従を現地向け差遣した<sup>15)</sup>。当時、関西地方を視察旅行中であった板垣内務大臣も急遽帰京し、22日午後、被災地の視察のため出発した。

表2は三陸津波での救援金・義捐品の一覧である。皇室からの恩賜金は6月22日に下賜され、各県が整備した配分規定に基づいて配分された<sup>16)</sup>。政府からの三陸震災救済費は7月7日に閣議決定され、第二予備金から総額約45万2,000円が支給された。岩手県の配分額は37万5,680円、このうち負傷者救護費は1万1,980円である。1人5円の割で算出され、その使用は専ら医

療に要する費用に限り、負傷者個人に治療費を分配してはならないと定められた<sup>16)</sup>。備荒儲蓄金は県によって儲蓄額に差があったのに加え、小屋掛け、農具、種籾のように農村を想定対象とするなど、漁村への配慮が欠けていた。またその使用が30日に限られており、それ以上の日数にわたり支給が求められる場合には適さなかった。

義捐金・義捐品の類も数多く寄せられた。仙台では消毒所を設けて、物品の消毒を行い、伝染病の蔓延を防いだ。物品輸送に関して、鉄道・汽船その他の海陸通運の諸会社が、運賃割引や優先取扱をして協力した。

### 3) 岩手県の対応

県は6月16日午後には警部長を気仙郡に、参事官を釜石山田方面に出張させ、さらに17日応急処置のため県属と警部を各地に派遣した。また医師・看護人を臨時雇用し、治療に従事させた<sup>18)</sup>。さらに19日には函館から急遽白米400石を買い入れ、郵船千歳丸にて宮古に直送し、各被災地に分配した。20日からは災害復旧のための人夫募集を行った。

災害対策本部となる罹災救恤事務所は6月19日に県庁内に仮設され、続いて21日盛町にも仮設された。知事自身は23日に視察のため現地に出発した。その他、

表2. 救援金の種類と総額<sup>17)</sup>

| 種 類     | 岩手県     | 宮城県     | 青森県      | 合 計      |
|---------|---------|---------|----------|----------|
| 恩賜金     | 10000円  | 3000円   | 1300円    | 14300円   |
|         | 2000円   | 1200円   | 不明       | 3200円    |
| 地方備荒儲蓄金 | 不明      | 37125円  | * 4400円  | 41525円   |
| 中央備荒儲蓄金 | 50000円  | 10000円  | 3000円    | 63000円   |
| 第二予備金   | 375680円 | 59650円  | 17293円   | 452623円  |
| 国庫剰余金   | 0       | 0       | 0        | 0円       |
| 義捐金     | 441798円 | 170865円 | * 23000円 | 635663円  |
| 合計      | 879478円 | 281840円 | 48993円   | 1210311円 |

注\*新聞記事による推測値。端数切り上げ。( )の数字は全備荒貯蓄金から中央備荒貯蓄金を引いて逆算したもの。恩賜金で2段書きになっている下段は皇太后・宮家からのもの。

県議会と有志者が海嘯罹災者救護方法調査会を設立、宮古でも有志者により罹災調査有志会などが設立された。7月18日には各郡長が県庁にて災害後経営について県と協議を行った<sup>11)</sup>。7月27日には臨時県議会を開催、応急の救済費として4万5,900余円を可決、税の免除・納税延期・小屋掛料や農具料などへの補助を決定した。

津波の来襲に伴い、流入した多量の土砂やごみ、人畜の死体の腐敗のために、被災地の衛生の悪化や伝染病の発生が危惧された。県会は6月18日には決議第44号をもって「海嘯後衛生上ノ注意」を策定、翌6月19日に告諭第6号を発した。その後も6月27日、7月24日、8月15日にもコレラ、赤痢、チフスの蔓延防止のため、衛生上の注意に関する告諭を発した。これら衛生対策は順次『岩手公報』に掲載された<sup>20)</sup>。

### 3. 岩手県の医療事情

1896(明治29)年の三陸津波での医療救護を述べる前に、当時の岩手県の医療事情について見ておきたい。岩手県では1885(明治18)年に県立岩手医学校が廃止となり、それに代わって1886(明治19)年に病院附属の医学講習所が開設されたが、1887(明治20)年9月の勅令48号により翌21年3月末に講習所が廃止、次いで1889(明治22)年3月に県立岩手病院が廃院となった<sup>21)</sup>。1896(明治29)年の時点における医師数は508名であり、医師の主力は藩政末期から明治初年にかけて養成された従来開業医であり、彼らの高齢化とともに医師数は減少しつつあった。

郡病院などの公立病院も、1886(明治19)年から1894(明治27年)にかけて財政難や経営難のために廃院となり、代わって私立病院が設立されていった。1891(明治24)年には公立病院が11、私立病院が5存在したが、1895(明治28)年には公立病院は全廃、私立病

院が11となった。ただし県は1895(明治28)年7月に衛生費補助法を定め、南北九戸郡にある久慈、宇部、軽米、伊保内、大野、葛巻、種市の7の私立病院に補助金を交付し、支援していた<sup>22)</sup>。

岩手県沿岸部の医療事情を示すエピソードとして、1882(明治15)年釜石に入港した船員からコレラが発生、上閉伊・気仙郡に蔓延し、約500名の死者を出した際、地方の開業医が感染を恐れて県の召還にも患者の依頼にも応じず、当時の岩手医学校教諭全員、気仙郡病院関係者が治療を担当したというものがある<sup>23)</sup>。なお岩手における看護教育は私立岩手産婆養成所が1897(明治30)年4月に開校したのが始まりで、修業年限は2年であった。

また1888(明治20)年からはじまった日本赤十字社の本社と支部からなる組織づくりの過程において、三陸津波で被害にあった青森、岩手、宮城の3県がどのような関係にあったのかを確認しておく。

日本の赤十字社は、全国的に社員を増加させるため、また有事の際に敏捷に活動するため、1888(明治20)年7月に地方委員及び支部規則を制定して、日本赤十字社本社と地方支部・委員部からなる体制づくりを進めていた。その際、委員長ならびに支部長は地方長官が兼任、各副長は書記官に、委員及び幹事は庁内高等官または属官に、その他は郡長区長及び地方名望家に囑託することを通例とした。三陸津波にかかわる3県、すなわち岩手、宮城、青森はいずれもこの1888(明治20)年の末に委員部となった。

支部と委員部の違いは、支部には経費として3分の1の使用権が認められており、委員部は10分の1の使用権しか認められていなかった点と、支部においては経費を用い、戦時救護に必要な医療材料の準備と看護婦を養成することが定められていた点にあった。そのため経費等の問題により、支部設置を希望する委員部



表3. 各県における委員部・支部設置年月日<sup>24)</sup>

|     | 宮城県                   | 岩手県                   | 青森県                   |
|-----|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 委員部 | 1887(明治20)年<br>12月10日 | 1887(明治20)年<br>11月12日 | 1887(明治20)年<br>12月28日 |
| 支部  | 1894(明治27)年<br>1月24日  | 1896(明治29)年<br>7月1日   | 1895(明治28)年<br>12月28日 |

が多く現れたが、日本赤十字社本社は1893(明治26)年に支部設立に制限を設け、正社員一千名以上を有すること、もしくは師団所在、京都ならびに北海道、開港場所在、兵営所在の府県であることなどを条件とした。第二師団が所在した宮城県は、1894(明治27)年1月24日に支部が設置された。

1895(明治28)年には支部は30、地方委員は17となっていた。青森県も1895(明治28)年12月28日に支部が設

置されていたが、岩手県は1896(明治29)年6月の津波発生の時点でもまだ、委員部であった<sup>24)</sup>。岩手県においては、津波の被害が沿岸全域にわたったという点を差し引いても、支部が設置されていた宮城や青森に比べ、救護のために使用できる経費や人員材料もなく、当然ながら活動においても十分な働きはできなかった。

1896(明治29)年7月1日、日本赤十字社は、日清戦争さらに社業の拡張、戦時の準備に急を要するとして、地方委員及び支部規則に関する細則を撤廃、支部規則その他付属規則を制定し、従来の地方委員制を全廃して全て支部とした。岩手県には津波による被害を受けてから15日後、支部が設置された(表3参照)。

参考までに、三陸津波に際し、宮城県では第二師団

表4 各地方における被害状況、病院・救療所設置状況、患者数

| 地方   | 被害状況 <sup>1)</sup> |        |       |        |       |     | 病院・救療所等 <sup>2)</sup>  | 救護期間 <sup>2)</sup> | 患者実数 <sup>2)</sup> |       |       | 患者延人数 <sup>3)</sup> |        |
|------|--------------------|--------|-------|--------|-------|-----|------------------------|--------------------|--------------------|-------|-------|---------------------|--------|
|      | 人口                 | 死亡     | 負傷    | 戸数     | 流失    | 半壊  |                        |                    | 傷者数                | 病者数   | 実数    | 入院                  | 外来     |
| 気仙郡  | 33,609             | 6,816  | 318   | 4,860  | 1,518 | 361 | 盛臨時病院(現大船渡市盛町)         | 6月25日～7月31日        | 144                | 258   | 402   | 2,419               | 1,720  |
|      |                    |        |       |        |       |     | 小友救療所(現陸前高田市小友町)       | 6月19日～7月1日         | 77                 | 14    | 91    | 320                 | 276    |
|      |                    |        |       |        |       |     | 赤崎救療所(現大船渡市赤崎町)        | 6月21日～6月29日        | 29                 | 36    | 65    | 210                 | 231    |
|      |                    |        |       |        |       |     | 綾里救療所(現大船渡市三陸町綾里)      | 6月21日～7月3日         | 46                 | 8     | 54    | 330                 | 335    |
|      |                    |        |       |        |       |     | 越喜来救療所(現大船渡市三陸町越喜来)    | 6月22日～7月11日        | 65                 | 3     | 68    | 479                 | 250    |
|      |                    |        |       |        |       |     | 唐丹臨時病院(現釜石市唐丹町)        | 6月21日～7月23日        | 59                 | 5     | 64    | 851                 | 692    |
| 南閉伊郡 | 16,259             | 6,669  | 1,414 | 2,926  | 1,799 | -   | 釜石臨時病院(現釜石市)           | 6月18日～9月11日        | 257                | 386   | 643   | 2,280               | 24,298 |
|      |                    |        |       |        |       |     | 大槌臨時病院鶴住出張所(現釜石市鶴住居町)  | 6月20日～9月11日        | 36                 | 53    | 89    | 445                 | 1,679  |
|      |                    |        |       |        |       |     | 大槌臨時病院(現上閉伊郡大槌町)       | 6月20日～7月31日        | 64                 | 95    | 159   | 899                 | 2,740  |
|      |                    |        |       |        |       |     | 宮古臨時病院(現宮古市)           | 6月20日～9月14日        | 175                | 264   | 439   | 305                 | 1,497  |
| 東閉伊郡 | 28,328             | 6,704  | 1,370 | 5,308  | 1,802 | 335 | 山田臨時病院(現下閉伊郡山田町)       | 6月23日～9月1日         | 275                | 412   | 687   | 283                 | 1,186  |
|      |                    |        |       |        |       |     | 重茂救療所(現宮古市重茂)          | 6月18日～9月18日        | 16                 | 25    | 41    | 50                  | 46     |
|      |                    |        |       |        |       |     | 田老救療所(現宮古市田老)          | 6月20日～8月20日        | 40                 | 59    | 99    | 74                  | 65     |
|      |                    |        |       |        |       |     | 小本救療所(現下閉伊郡岩泉町小本)      | 6月17日～8月2日         | 14                 | 21    | 35    | 17                  | 32     |
| 北閉伊郡 | 7,153              | 1,680  | 425   | 1,181  | 298   | 238 | 普代救療所(現下閉伊郡普代村)        | 6月20日～7月30日        | 60                 | 91    | 151   | 35                  | 138    |
| 南九戸郡 | 13,448             | 1,074  | 694   | 2,133  | 320   | -   | 門前救療所(現久慈市門前)          | 6月15日～6月26日        |                    |       |       | 252                 | 264    |
|      |                    |        |       |        |       |     | 私立久慈病院(現久慈市)           | 6月27日～7月31日        |                    |       |       | -                   | 315    |
|      |                    |        |       |        |       |     | 私立宇部病院(現久慈市宇部町)        | 6月16日～7月31日        |                    |       |       | -                   | 235    |
|      |                    |        |       |        |       |     | 私立宇部病院小袖出張所(現久慈市宇部町)   | 6月15日～7月10日        | 5                  | 8     | 13    | -                   | 338    |
|      |                    |        |       |        |       |     | 野田救護病院(現九戸郡野田村)        | 6月15日～7月24日        | 28                 | 41    | 69    | 800                 | 1,960  |
|      |                    |        |       |        |       |     | 野田救護病院久喜出張所(現久慈市宇部町)   | 6月15日～7月24日        | 14                 | 22    | 36    | -                   | 1,440  |
|      |                    |        |       |        |       |     | 久慈救護病院(現久慈市)           | 6月27日～7月31日        | 9                  | 0     | 9     | 315                 | -      |
|      |                    |        |       |        |       |     | 久慈救護病院中野救護所(現九戸郡洋野町中野) | 6月16日～7月31日        | 7                  | 11    | 18    | 94                  | 47     |
| 北九戸郡 | 7,777              | 366    | 175   | 1,068  | 183   | -   | 久慈救護病院侍濱出張所(現久慈市侍濱町)   | 6月16日～7月24日        |                    |       |       | 80                  | 640    |
|      |                    |        |       |        |       |     | 久慈救護病院種市出張所(現九戸郡洋野町種市) | 6月16日～7月24日        |                    |       |       | -                   | 1,480  |
| 計    | 106,574            | 23,309 | 4,396 | 17,211 | 5,920 | 934 | 計25                    |                    | 1,420              | 1,812 | 3,232 | 10,538              | 41,904 |

1)管内海嘯被害概数取調一覧表(明治二十九年六月二十一日午後六時調の分)。明治29年6月25日付『岩手公報』掲載、国立国会図書館蔵。単位は人口・死亡・負傷は人、戸数、流失、半壊は戸。備考として「人口戸数は警察署の戸口調査によりし者にて被害数は時々増加を来たすにより日々変更なるべし。流失家屋の内には破壊家屋の数をも加いなりたるにより流失の数を減し破壊の数を増加せり。死亡人員は行方不明の数も加いなりたれども鳥嶋■漂着したるを発見せしにより二十日の報告に比し減少せり。また南北九戸郡の如き死体発見なきものは死者の数に加いざるを以て発見次第その数を増加すべし。」と記載あり。

2)岩手支部より本社宛明治30年12月4日付提出救護誌編集材料取調に対する回答より救護員派遣人数。日本赤十字社書類『三陸海嘯救護書類明治29年至32年』博物館明治村所蔵。単位は人。

3)岩手支部より本社宛明治30年3月30日付提出海嘯救護果況調第3010号救護所設置場所日数調、負傷者救護数調。日本赤十字社書類『三陸海嘯救護書類明治29年至32年』博物館明治村所蔵。単位は人。

や第二高等学校医学部、開業医組合等の医員・看護婦が活動した。日本赤十字社本社からの救護員の派遣は看護婦3名のみにとどまり、日本赤十字社宮城支部で養成中の看護婦生徒も休暇中であることを理由に救護に参加しなかった<sup>25)</sup>。しかし宮城県勝間田知事は、負傷者救護に関する事業を日本赤十字社宮城支部に委託し、自ら日本赤十字社支部長として負傷者救護事業を統括した。

#### 4. 三陸津波における医療体制

三陸津波に際して行われた岩手県の医療救護は、県が統括し、日本赤十字社の委員部がこれを補助するか

たちをとった。すなわち岩手県に要請され、現地に出張、派遣された医療者は全て、地方庁の救護事業に属するという位置づけのもとに救護活動を行った<sup>26)</sup>。

##### 1) 救護所

沿岸部全域が被害を受けたため、病院・救療所等は全長82里(332km) 6郡にわたり25カ所に設置された。表4には行政単位毎の人口、負傷者、死者、戸数、流失、半壊戸数を示し、病院・救療所等の設置状況(開設期間)、患者実数(傷者、病者)と患者延べ人数(入院、外来)を示した。病院は周辺の救療所や救護所、出張所から重傷患者を集め、入院させるなどして手術を行ったと考えられるが、救療所、救護所、出張所に

表5 各病院・救療所等における救護員の種別・人数

| 地方   | 病院・救療所等2)              | 日本赤十字社本社 |      |     |      |     |    | 日本赤十字社支部 |     |     |    | 陸軍  |    |     |     | 帝国大学 |     | 東京有志 |     | 地方篤志者 |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|------|------------------------|----------|------|-----|------|-----|----|----------|-----|-----|----|-----|----|-----|-----|------|-----|------|-----|-------|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|----|----|---|
|      |                        | 医員       | 看護婦長 | 看護婦 | 看護婦長 | 調剤員 | 使丁 | 医員       | 看護員 | 事務員 | 医員 | 看護員 | 軍医 | 看護長 | 看病人 | 軍医   | 看護長 | 看病人  | 医学士 | 医学生   | 医士 | 看護婦 | 医士 | 看護婦 | 看護員 | 事務員 | 調剤員 | 小使 | 炊事 |   |
|      |                        |          |      |     |      |     |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
| 気仙郡  | 盛臨時病院（現大船渡市盛町）         | 3        | 1    | 9   |      |     |    | 1        | 1   | 2   |    |     | 7  |     | 15  | 1    |     |      | 4   |       | 1  | 9   | 13 | 13  |     | 5   | 1   | 10 |    | 1 |
|      | 小友救療所（現陸前高田市小友町）       |          |      |     |      |     |    | 1        |     |     | 1  |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     | 3  |     | 1   |     |     |    |    |   |
|      | 赤崎救療所（現大船渡市赤崎町）        |          |      |     |      |     |    | 1        |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     | 1   |     |     |    |    |   |
|      | 綾里救療所（現大船渡市三陸町綾里）      |          |      |     |      |     |    | 1        |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     | 1   |     |     |    |    |   |
|      | 越喜来救療所（現大船渡市三陸町越喜来）    |          |      |     |      |     |    |          |     |     | 1  | 1   |    |     |     | 1    | 1   |      |     |       |    |     |    |     |     | 1   |     |    |    |   |
|      | 唐丹臨時病院（現釜石市唐丹町）        |          |      |     |      |     |    | 1        | 1   | 1   |    |     |    |     |     | 3    | 2   | 20   |     |       |    |     | 1  |     |     |     |     |    |    |   |
| 南閉伊郡 | 釜石臨時病院（現釜石市）           | 2        |      |     |      | 5   |    | 6        |     |     |    |     | 6  | 1   | 21  |      |     |      |     |       |    |     |    | 2   | 1   | 7   |     | 7  |    |   |
|      | 大槌臨時病院鶴住居出張所（現釜石市鶴住居町） |          |      |     |      |     |    | 1        |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      | 2   | 2     |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 大槌臨時病院（現上閉伊郡大槌町）       |          |      |     |      |     |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    | 4   |    |     | 3   |     | 4   |    |    |   |
| 東閉伊郡 | 宮古臨時病院（現宮古市）           | 2        | 1    | 10  | 1    | 3   | 1  | 1        | 1   |     |    | 2   | 1  |     |     |      |     |      |     |       |    |     | 2  |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 山田臨時病院（現下閉伊郡山田町）       | 3        | 2    | 8   |      | 4   | 1  |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    | 1   |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 重茂救療所（現宮古市重茂）          |          |      |     |      | 2   |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 田老救療所（現宮古市田老）          |          |      |     |      |     |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     | 1  |    |   |
| 北閉伊郡 | 小本救療所（現下閉伊郡岩泉町小本）      |          |      |     |      |     |    | 1        |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 普代救療所（現下閉伊郡普代村）        |          |      |     |      |     |    | 2        |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
| 南九戸郡 | 門前救療所（現久慈市門前）          |          |      |     |      |     |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 私立久慈病院（現久慈市）           |          |      |     |      |     |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 私立宇部病院（現久慈市宇部町）        |          |      |     |      |     |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 私立宇部病院小袖出張所（現久慈市宇部町）   |          |      |     |      |     |    | 1        |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 野田救護病院（現九戸郡野田村）        | 2        |      |     |      | 7   |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 野田救護病院久喜出張所（現久慈市宇部町）   | 1        |      |     |      | 3   |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 久慈救護病院（現久慈市）           |          |      |     |      |     |    | 1        |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     | 1  | 5   |     |     | 5   | 1  |    |   |
| 北九戸郡 | 久慈救護病院中野救護所（現九戸郡洋野町中野） |          |      |     |      |     |    | 1        |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 久慈救護病院侍濱出張所（現久慈市侍浜町）   |          |      |     |      |     |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      | 久慈救護病院種市出張所（現九戸郡洋野町種市） |          |      |     |      |     |    |          |     |     |    |     |    |     |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |
|      |                        | 13       | 4    | 27  | 1    | 25  | 2  | 1        | 19  | 2   | 3  | 4   | 2  | 13  | 1   | 36   | 5   | 3    | 20  | 6     | 2  | 1   | 9  | 19  | 21  | 6   | 19  | 1  | 27 | 2 |
|      |                        | 103      |      |     |      |     |    |          |     |     |    |     |    | 191 |     |      |     |      |     |       |    |     |    |     |     |     |     |    |    |   |

岩手支部より本社宛明治30年12月4日付提出救護誌編纂材料取調に対する回答より救護員派遣人数。日本赤十字社書類綴『三陸海嘯救護書類明治29年至32年』博物館明治村所蔵。単位は人。山田臨時病院の看護婦長2は看護婦長心得

においても入院患者数が記録されているため、該当する施設では入院治療も行ったと考えられる。

## 2) 救護員

表5は各治療所で救護を行った人々の職種別一覧である。沿岸の南に位置する気仙郡(盛地方)、南閉伊郡(釜石地方)には、陸軍、大学、東京、栃木の篤志者などが大勢訪れた。これらの地域には道は険しいが、気仙沼や一関からアクセスするルートがあった。一方、沿岸の中ほどから北に位置する東閉伊郡以北(宮古や久慈地方)はさらに交通が不便であり、これらの地域は岩手県、日本赤十字社の本社と福島支部が担当した。

### (1) 日本赤十字社岩手委員会(後に支部)

日本赤十字社岩手委員会から派遣された医員・看護人は、すべて津波被害に際して臨時雇用されたものである。6月16日には釜石・気仙地方へ医員1名、看護人1名(計4名)が派遣され、さらに医員が不足しているとの報により、同じ釜石・気仙地方に向けて医員が3名ずつ(計6名)派遣された。その後、18日には久慈地方に医員3名が派遣された。災害発生の当初こそ、岩手県が地方の開業医や看護人を雇用し、現地に派遣するかたちをとったが、7月には、被災地で救護に携わった現地の開業医や篤志看護婦たちを、日本赤十字社岩手支部の囑託にして現地医療を担当させていった。

### (2) 地方の開業医ならびに篤志の看護婦・看護人

被災地在住の開業医は津波により行方不明になるか、あるいは自らも被害にあって医療に従事できない状態となったため、現地には大勢のボランティアの医師・看護婦・看護人が訪れ、救護を行った。新聞紙上には、釜石地方については元宮城県立病院看護婦、釜石高等小学校女教師、盛地方については近隣の村から駆けつけた開業医、盛高等小学校女生徒、宮古地方についても官吏と警部の妻7名、女学校の生徒等が紹介され、ボ

ランティアの医士や看護婦として活動したことが記されている<sup>27)</sup>。

### (3) 日本赤十字社本社

岩手委員会からの日本赤十字社本社への第一報は6月16日であった。釜石、気仙地方が津波により多数死傷者が出ているので直ちに医員看護人事務員1名ずつ両地に派遣した、その旨承認してほしい、電報が不通であり詳細不明のため追って申告する<sup>28)</sup>という内容であった。

日本赤十字社本社は委員会からの救護員派遣を承認するとともに、社則第10条に基づき、常議会を経ずに日本赤十字社本社からも救護員を派遣することを決定した。これは1892(明治25)年の社則改定時に追加されたもので、天災時には社長は臨時常議会を招集し、出席員定員数を満たなくても議決をなすことができること、また天災の惨状により急に常議会を召集できない場合は救護の事務実施の後、その承認を求めることができるという規定に依った。

日本赤十字社本社は6月17日に第1回派遣救護員を出発させて以来、主として宮古地方と久慈地方を担当し、7月には第二師団や陸軍軍医学会、帝国大学医科大学の引揚げに際し、県の要請により釜石・盛地方にも救護員を派遣した。計74名である。救護開始は宮古で6月19日からであった。

第1回派遣の救護員(医員1名、看護人3名)は、6月17日に出発、翌18日盛岡に到着、委員会との協議により即日、宮古に向かった。大森医員は後に医長心得となり、宮古とその付近にある田老・重茂・山田等、久慈地方を統括し、救護を行った。

第2回派遣の救護員(医員3名、調剤員2名、看護人10名)は、6月18日に出発し、21日に宮古に到着、山田・田老・重茂の各地に分派され救護の任にあたった

第3回派遣の救護員(医員3名、看護人10名)は、

6月19日に出発し、22日に九戸郡久慈町に到着。野田村と久喜村の両方の地に救護所を設置した。

第4回派遣の救護員（看護婦4名）は、6月22日に出発し、24日に宮古着、第5回派遣の救護員（看護婦6名）は、23日に出発し、26日に宮古着、いずれも宮古臨時病院において救護に従事した。

第6回派遣の救護員（医員1名、看護婦11名）は、6月29日に出発し、7月2日に宮古地方の山田臨時病院に到着、救護を行った。

第7回派遣の救護員（医員5名、看護婦9名、看護人5名）は、7月15日に出発し、18日から19日にかけて釜石・盛地方に到着した。

その他、日本赤十字社は毛布200枚を送付、佐野常民社長は手拭い1200、風月堂より寄贈のビスケット30箱、日本赤十字社の群馬支部と福島支部の看護婦生徒が包帯巻軸をそれぞれ700、100づつ寄贈した。

表6では、明治三陸津波における負傷者救護に関する日本赤十字社岩手支部、宮城支部、本社の経費を比較した。ここには患者の治療・看護に用いられる救護費とともに、救護員の旅費や滞在費などの救護施行費が含まれる。本社の費用は本社、青森支部、岩手支部、

宮城支部の費用が合算されたものである。

明治三陸津波における日本赤十字社の救護費の総額は2万5千円に上る。これは、1891(明治24)年の濃尾震災で日本赤十字社本社および京都支部、賜金等も含めた総額が3,294円余であったのと比較すると高額である。また三陸津波における救護費を岩手県と宮城県とで比較すると、岩手県のほうが被害の範囲が大きかったにもかかわらず、宮城県では支部が県下の医療資源を十分に活用したために経費が岩手県を上回っている。岩手県の不足した資金と人材は本社が代わって提供したと考えられる。

なお宮城県が国庫救済金によって支払った負傷者救済費は2,459円68銭1厘であり、国庫救済金の交付により生じた余剰金1,800円を宮城県は日本赤十字社に下付した。その経緯について宮城県は「日本赤十字社は負傷者救護によって報酬を得ようとするものではないが、国庫救済金の交付により生じた1,800円の余剰金は日本赤十字社に交付して、三陸津波の救護に用いた社費の幾分かを補助することにした」<sup>29)</sup>と書いている。

（4）日本赤十字社福島支部

日本赤十字福島支部は6月21日に宮古地方に向けて医員2名、看護人1名、22日には気仙郡に向けて医員2名、看護人1名を派遣した。宮古に派遣された医員は6月23日に到着、日本赤十字社本社派遣の医員と協力し、7月29日まで活動した。盛に派遣された医員も6月23日に救護を開始したが、軍医などの到着により6月30日には帰部した<sup>30)</sup>。

（5）第二師団

第二師団は1888(明治21)年仙台鎮台を改編し設立され、1894-95(明治27,8)年の日清戦争において山東半島の威海衛攻略に参加した。津波発生当時、凱旋後まもない時期であった

表6. 日本赤十字社における救護費<sup>29)</sup>

|          | 岩手支部        | 宮城支部         | 本社           |
|----------|-------------|--------------|--------------|
| 収入の部     |             |              |              |
| 資本部より移入  | 3,028円46銭8厘 | 8,528円1銭1厘   | 22,960円14銭5厘 |
| 救護寄付     | 41円91銭5厘    | 59円80銭       | 2,359円58銭9厘  |
| 雑入       | -           | 22円30銭5厘     | 22円30銭5厘     |
| 総計       | 3,170円38銭3厘 | 8,610円11銭6厘  | 25,342円3銭9厘  |
| 支出の部     |             |              |              |
| 治療諸機械買入費 | 50円67銭      | -            | -            |
| 患者救療費    | 545円49銭2厘   | 1,295円13銭5厘  | 5,407円18銭1厘  |
| 救護施行費    | 2,574円22銭1厘 | 3,434円96銭8厘  | 19,934円85銭8厘 |
| 総計       | 3,170円38銭3厘 | 4,730円10銭3厘  | 25,342円3銭9厘  |
|          |             | △3,797円90銭8厘 |              |

宮城支部は3,880円1銭3厘を本社に返納。  
宮城県は金1,800円を日本赤十字社に下付。

ため、従軍した下士官や兵が郷土に帰って被害に遭う、祝賀会の最中に被害に遭うケースもあった<sup>31)</sup>。

この津波に際し、第二師団は岩手県知事の要請により<sup>32)</sup>、釜石及び盛地方に軍医9名と看病人6名を派遣し、大槌以南の各地(吉濱、綾里、小宮、大船渡など)に軍医を配置させた。また潰家屋又は死者埋葬補助のため工兵一小隊を宮古に派遣した。

救護開始は釜石で6月21日、盛で23日である。盛地方に派遣された斎城軍医は、新聞記者の取材に対して、第二師団は凱旋から間もないので被災地に長く滞在できないと述べた<sup>33)</sup>。岩手県では軍医の派遣は県の要請により行われたが、宮城県では軍医たちは日本赤十字社宮城支部の事業として赤十字の補助を行った。

これら軍医・看護人の出張旅費等については、第二師団長である乃木希典が災害発生に際して急遽、宮城、岩手、青森に軍医各2名派遣した分については第二師団が支弁、その後の6月20日以降の派遣分については派遣された県の支弁となった。

陸軍当局は、咄嗟の機転を利かせて軍医・看護人を派遣した乃木希典師団長に対し、各県知事からの正式な要請を得るという手続きを経ることを要求した。その手続きにおいて、軍医・看護人派遣に関する費用は県が支弁することが決定された。陸軍省は、それ以前に乃木師団長が派遣した軍医・看護人の出張旅費等は師団が支弁するように命じた<sup>34)</sup>。

#### (6) 陸軍軍医学会

陸軍軍医学会は6月24日に第一師団から軍医5名、看護人長以下25名を出発させた。石黒陸軍軍医総監は派遣に際して訓示を行い、冒頭で災害地ではチフスの流行が懸念されるので死体は必ず火葬するよう注意を促した上で、被害地一帯はすべてにおいて不便であり、人夫も利用できないと聞いている、軍医には戦地に赴くと同じように軍装させ、野宿もできる、薬剤その

他も万全の準備を整え、一切人の手を借りないような仕組みにしているので、いかなる困難にも辞退せず立ち向かい、患者の治療を迅速に行い、創部を腐敗させないことを期待すると述べた<sup>35)</sup>。

当初、軍艦にて宮古に到着したが、すでに日本赤十字社が救護を行っており、人員は足りているという理由で、盛地方に向かった。6月28日に盛町に到着、同町を中心に救護を行った。

#### (7) 帝国大学医科大学附属病院

帝国大学医科大学付属医院からは医学士6名、他2名が派遣された。6月27日には盛町に到着し、救護活動を開始した。経費は大学職員の寄付によって捻出された<sup>36)</sup>。

#### (8) 東京有志看護婦会

京橋区西紺屋町八番地に所在した看護婦会である。当初、宮城県知事に自費による出張、救護を願い出たが、救護員は充足しているとの理由により謝絶され、岩手県知事へ願い出て、同知事より許可を得て、盛町へ向け出発した。7月9日付『自由新聞』には「東京医師鈴木国三郎氏の引率し来れる看護婦九名は急行昼夜を捨てす途中雨を侵し険坂を越へ何れも軟弱なる婦女子の身を以て難苦を耐え忍び盛町に着するや否最も懇切に患者を看護せり」<sup>37)</sup>という記事がある。

#### (9) 栃木県篤志医師

宇都宮共立病院の副院長永峯九郎、医師平松孚之の2名である。6月24日に盛岡に到着、県属と同行し、釜石地方で救護を行った<sup>38)</sup>。

その他、英国二等軍医エス・ウェスコット氏より医術上の助力をしたいとの旨、英国公使を経て西園寺外務大臣へ申し出があり、外務省は日本赤十字社に照会したが、社は救護上十分の余地があるとして厚意を謝絶した<sup>39)</sup>。

## 5. 各地方における日本赤十字社の活動と医療上の問題

以下、日本赤十字社が救護活動を行った宮古地方、久慈地方、盛地方、釜石地方における同社の活動と医療上の問題を述べる。

### 1) 宮古地方

日本赤十字社が最初に救護員を派遣した地方である。

宮古は県下では屈指の市街であり、比較的被害は少なかったが、宮古に並ぶ鰺ヶ崎は被害が大きく、その付近にある田老・重茂・山田等各地も惨状を極めた。

第1回救護員となる大森医員らは、6月17日に東京を出発、18日午前に県庁に着き、服部知事と面会するがほとんど情報は得られなかった<sup>40)</sup>。県庁のある盛岡から宮古へは約27里(約108km)の道のりであり、車で6里(約24km)ほど進んだところで車夫が谷間への転落を恐れ、乗車を拒否したため下車、残りの約80kmを徒歩で現地に向かった。19日の午後には宮古に到着、書記官・郡長などと協議、被害が広域であるため、宮古高等小学校を主たる治療所とし、釜ヶ崎、山田、重茂、田老など各地に派出治療所を設け、各地の重症者を集めて治療を行い、軽症者は派出所で救療する方針とした<sup>41)</sup>。

戦時救護のシステムの応用と考えられるこの方針は、災害では適用が困難だった。山田では地形により負傷者の移動が困難なため、当初の方針に反して別個に救護所が設置された。そのため宮古に次いで多くの救護員を常駐させた。重茂も当初、住民により道が険しく人手が足りないという理由で、重傷者の搬送が拒否されたが、この地域に派遣された日本赤十字社の看護人が「此協議コソ患者死生ノ岐路」と先の救護方針を強く主張、村長の尽力もあって重傷者の搬送が実現した。田老は被害が甚大な地であったが、日本赤十字社の医員は常駐しなかった。

山田ではもともと在住の医士は開業医1名のみであり、津波発生当時は1時間ほどで医薬品が底をつき、空しくただ患者の死を待つのみであった事情もあり、赤十字の救護員の到着は「地獄に菩薩」と喜ばれた。救護所は自発的に自宅の使用を申し出た住民の家を借り、学校の机を患者のベッドとし、たらい等を膿盆の代わりに用いて治療が行われた。

救護員は治療上の困難として、井戸水の不良(山中の湧水を使用)、衣類の不潔、創面に膏薬を貼用(即効紙と称するもので、洗浄にて容易に除去できず、多くの時間を要する)、飲料水の確保・室内清掃・洗濯・食事のための使役者の皆無、言語の不通(方言)をあげた。破傷風の患者が2名発生したが、残念ながら両名とも死亡した。

当初、住民たちは日本赤十字社を「耶蘇教」と誤解し、あるいは外科的手術を恐れて逃げ出すこともあった。しかし医員が懇切に接し、巡査や村の開業医が赤十字の趣意について分かりやすく教え、諭したために、徐々に赤十字社の信用は高まった。やがて罹災に関係のない病者を連れてくる者、障害者や不治の病で相談に来る者が増えてきた<sup>42)</sup>。これらのエピソードは1891(明治24)年の濃尾震災と類似している。

三陸津波での看護婦派遣については、当初、岩手県知事は道が険しいという理由で反対した。大森医員は宮古に到着してから書記官等と協議し、看護婦を呼び寄せることにしたが、結局、盛岡にいる知事の同意を得るためには郵送の手段を取るしかなく、派遣までに時間を要した。彼は知事を説得するため、創の状態がかなり悪いこと、患者数が増加していること、病室の整備や医療材料の整頓が不十分なこと、患者の手術室への運搬が不慣れで、救護員が長時間の勤務となっていることを理由にあげた<sup>43)</sup>。日本赤十字社本社から派遣された看護婦は馬や徒歩によって約100kmの道のり



を現地に向かった。到着してからは、患者の看護と手術介補の一切を看護婦が担当、器械包帯材料、寝具の出納、病室の取り締まりを看護人が担当するなど、役割の分担が行われた。

日本赤十字社は現地医療の復興のため、宮古及び近辺の開業医に日本赤十字社岩手支部救護員の名を与え、日本赤十字社本社派出員の指揮のもとに救護活動をさせる方針とした。6月末には治療所で活動している篤志看護婦は7名となり、日本赤十字社本社から派遣された看護婦長が朝夕一時間ずつ看護法を講話するなどして女性たちを教育し、彼女らも病院看護に習熟していった。彼女らは日本赤十字社本社の救護員が引揚げた後、現地医療を担った。

## 2) 久慈地方

久慈地方へは日本赤十字社から第3回派遣の医員3名、調剤員2名、看護人10名が派遣された。彼らは6月19日午後2時30分に東京を出発し、20日に盛岡に到着、そこから一步誤れば谷底に転落するような険しい道を、盆をひっくり返したような大雨のなか現地に向かった。道が険しいため、この地方には看護婦は派遣されなかった。

救護員たちは6月22日に久慈町に到着した。同町では私立久慈病院や私立宇部病院などによる救護体制がおおむね整っていたため、南に3里進んだ野田村、久喜村方面への救援を依頼された。途中、宇部村でこれらの村では患者が60名ほどいるが一ヶ所に収容していないため、地方の医士が日々奔走し、疲労困憊していると伝え聞いた。日本赤十字社の医員たちは重症患者を一ヶ所に集める方針を伝え、説得を試みたが、住民が従わないとの理由により実行できず、いずれは一ヶ所に集めるつもりで、やむをえず野田村に野田救護病院を設置、同所に医員2名、看護人7名を配置、そして久喜村に野田救護病院久喜出張所を設け、医員1名、

看護人3名を分派した。

野田村は戸数411戸、人口2,641人であり、家屋全壊が136戸、死亡261人、負傷者62名の被害を出した。日本赤十字社は、海蔵院を野田救護病院とし、患者を収容したが、なかには医療を受けるのを嫌がり、逃げ隠れする者もあったため出張診療を行った。新聞には「野田村の患者包帯のまま田圃に入る」という記事がある。負傷者の創部に防腐剤を施して包帯を巻いて治療を期しても、医師の指示を守らず、痛みが薄らぐと包帯のまま田圃に入って、創部が汚染させるのもかまわないで働いていること、また住民は医士警官等の姿を見つけたら、慌だしく負傷者を自宅に帰らせ、申し訳程度に寝床に横たわらせているという記事もある。また同様に久慈地方でも「患者、薬を持って帰って飲まず」「山上に逃げ、降りてきて治療を受けず」、「医師の宿泊を謝絶する」、「治療所に入らず」などの記事がある<sup>44)</sup>。

先にも述べたように、久慈地方では1895(明治28)年になって私立病院への補助が行われ、無医村から解放されたばかりであった。これら住民の行動の背景には、これまで医療を受けるという習慣があまりなかったことや、負傷者として療養するよりも生活者として被災後の後片づけや生活のための労働を優先せざるをえないなどの事情、あるいは再度の津波を恐れ、高い場所に避難したまま低地に降りてこない被災者特有の心理があったものと考えられる。

日本赤十字社の救護員は、医療資源の少ない地域で、負傷した住民の訪問診療などを行い、現地の医療者の負担を軽減するなどの役割を果たしたものと考えられる。またこの地方に出張した医員たちは、現地の気候は夏でも寒く、また食事の副食は味噌汁と漬物のみであり、漁をする舟がないため魚がなく、卵も少なく、牧牛はいたが住民は食べる習慣がなく、滋養物が不足

したことを記録している<sup>45)</sup>。

### 3) 盛地方

災害発生後、早い段階で県庁に被害の報告が届いた地方である。日本赤十字社岩手委員部は6月16日には**盛町**に医員1名、看護人1名を派遣し、その後3名の医員を追加派遣した。最初のうちは、負傷者があまりに多く、広域にわたっていたため、随所で治療が行われざるをえなかった。

6月23日以降、日本赤十字社岩手委員部派遣の開業医に加え、日本赤十字社の福島支部、第二師団、陸軍軍医学会、帝国大学医科大学病院、東京、栃木の有志者などさまざまな団体がこの地を訪れた。軍医により臨時病院が開設され、各地の救護所の重傷者を収容するなどして救護体制が整えられたが、その一方で被災直後から現地で活躍し、以降、継続して現地の医療を担っていくはずの現地の医療者への配慮が十分なされないまま、後から現地に出張してきた軍医等の派遣医が現地を統率することにもなり、混乱が生じた。日本赤十字社岩手委員部から派遣された現地の開業医も、新聞において**盛地方**に病院や療養所を設置したのは軍医ではなく日本赤十字社岩手支部派遣の医士であったことを主張し、後に**盛地方**に派遣された日本赤十字本社の医員もその状況を「地方医と派遣医との間に主客の別なく、利害が衝突、円滑さを欠く」<sup>46)</sup>状況であったと表現した。

日本赤十字社は、第二師団および陸軍軍医学会の医員・看護人の引揚げにともない救護が手薄にならないようにするため、岩手県から7月になって救護員派遣を要請された。山上兼輔を医長心得とする第7回派遣のメンバーは医員3名と看護婦長俊野イワ他看護婦10名であった。彼らは7月15日に東京を出発し、18日早朝、**盛町**にて第二師団派遣の中館一等軍医より引継ぎをうけた。

日本赤十字社の記録によると**盛臨時病院**の病室はすべて畳であり、寝具は患者一人につき敷布団と毛布2枚が与えられ、夜になると5、6人につ蚊帳が準備された。小使が室内清掃を行い、厠は清掃後に石灰乳が散布された。衣類は寄贈の単衣が各一枚与えられていたが、地方の習慣で盛夏にもかかわらず袷や綿入を着こむものが多く、清潔な単衣を着用するものは少なかった。食事は白米の粥(胃腸炎のため)、滋養品として鶏卵、ミルク、くず粉などが提供されたが十分な量を提供できなかった。軽症者は毎日入浴、重傷者は看護婦が毎日1回清拭を行った。運動は医員の許可のもと適宜行わせ、面会規則もあった。

看護婦の勤務時間は毎日午前5時より午後7時までであり、夜間は4名で半夜づつ交代して不寝番をした。看護婦の配置は看護婦1名につき最重病者では1～2名、重病者では3～4名、軽病者では6～8名であり、外来患者では数に関係なく看護婦1名であった。救護員の宿舎は**盛町**の旅館が充当された。

以上の救療活動のかたわら、日本赤十字社の山上医員は7月19日から22日にかけて、日本赤十字社岩手支部の支部長・郡長と協議、善後策をまとめた。できるだけ地方の医士と篤志看護婦に托す方針とし、彼らを見習いのため救護に参加させ、支部長に稟議して彼らを日本赤十字社岩手支部の嘱託とした。31日には支部医員1名、支部嘱託の地方医2名への引継ぎを完了した。

### 4) 釜石地方

**盛地方**と同じく災害発生後、早い段階で県庁に被害の報告が届いた地方である。**釜石**では在住の開業医4名のうち3名が津波に流され行方不明となった。日本赤十字社岩手委員部からの医員4名、看護人1名が6月17日以降、順次到着した。**盛地方**と同じく、当初は負傷者の数が圧倒的に多く、十分な救護は行えなかった。21日以降になって第二師団をはじめ、帝国大学医

科大学病院、栃木県の篤志医師などの救護員が訪れ、臨時病院が組織され、救護事務が整理された。

日本赤十字社の救護員は、盛地方と同じく、第二師団軍医の引揚げにより救護体制が手薄にならないために派遣された。彼らは7月15日に東京を出発し、17日に釜石に到着、斎城一等軍医と面会し、引継ぎを行った。さまざまな団体が派遣されたことによる混乱は、盛地方と同様に起こった。後でこの地方に派遣された日本赤十字社の医員は、派遣された団体がそれぞれに活動していたために、各自の手許に書類があり、経過説明も困難であったことを伝えた。

日本赤十字社の救護員たちは7月18日より活動を開始した。釜石字澤村高等尋常小学校が救護所であり、入院患者は57名であった。救護員はまず、軍医によって掲げられた門前の「釜石臨時病院」の立て札を「日本赤十字社釜石救護治療所」と改め、赤十字旗を立てた。病室は小学校の机を寄せ集め、布団を敷き、腰掛を床頭台として薬品食品を置いた。患者が配布した病衣を着用しないこと、滋養物の入手が困難なこと、病室の清掃・便所の消毒を行い、入浴と清拭により患者の清潔を保ったことなどは盛地方と同じであった。書類を調製し、職員は午前7時に出勤し、午後6時に退出した。

当初は日本赤十字社岩手支部と本社との関係が不明瞭のため、事務局・職員などの挙動が一致しなかったが、7月26日に山上医長心得が釜石を訪れ、郡長と善後策について協議し、説明が行われた後は、要領を得るようになった。日本赤十字社の本社と岩手支部の救護員は軋轢を起こすことなく終始協調して活動した。

腸チフス、赤痢の疑いのある患者が発生したが、幸いにも蔓延することなく済んだ。7月末には外来患者60~70名のうち津波の罹災者は20名ほどとなった。7月31日には岩手支部救護員に引渡し完了した<sup>47)</sup>。

## 6. 三陸海嘯における日本赤十字社の活動方針

以下、三陸津波における救護員の記録から、当時の日本赤十字社や救護員がもっていた災害救護における活動方針をまとめた。先に述べたように日本赤十字社における災害救護のとりくみは、1888(明治21)年の磐梯山噴火を端緒とし、この時期続いて起こった大規模な災害を通じて、経験を積んできた。以下に見る活動方針は、これらの実践を通じて日本赤十字社の救護員たちが蓄積していった経験的知識を反映していると考えられるからである。

### 1)「委員総長の指揮に従い充分救護をなすべき」

地方長官の指示に従い活動するという方針は、1888(明治21)年の磐梯山噴火における救護活動から、つねに日本赤十字社の社長佐野常民が救護員に訓示してきたものである。三陸津波においては災害発生当初こそ、岩手県知事の要請を待ったが、現地に医員が駐在するようになってからは医員の判断に基づき、県知事に承諾を得て、救護活動を展開した。災害救護は内務省の管轄であり、地方長官との関係において行われる。この時代、日本赤十字社本社と支部からなる体制づくりが進んで地方長官との関係が密接になったことも、この災害での迅速な災害救護の実施に影響したと考えられる。

### 2)「本社救護員は動作の中心となれ」

医長心得として宮古・久慈地方を担当した大森による言である。宮古を担当した大森医員、盛・釜石地方を担当した山上医員はそれぞれ現地医療におけるリーダーシップを発揮した。開業医や他の団体からの派遣医と協力して、重傷者と軽傷者を分けて効率的に治療を行う救護体制を確立し、さらには速やかに現地医療の建て直しのため地方官吏と協議のうえ善後策をまとめて実行していった。

### 3)「早く飛び出し手軽く始末つけ早く引揚げよ」

これも大森医員の報告書に記されたもので、正確には「救護に出張する際は早く飛び出し手軽く始末つけ早く引揚げよものが一番利口の連中に御座候」である。文体から先発隊のリーダーとして真っ先に被災地に派遣された大森の意気込みが伝わってくる。

大森は今回の被災地のような不便な場所では早く治療を開始し、加えて被災地が広域にわたる場合は各地に救護所を設けて手広く活動することが必要であるとし、例として1891(明治24)年の濃尾震災における岐阜県古橋村での救護をあげながら、岩手においても愛知岐阜と同じく迅速に救護を行うべきであり、「交通の如何により慈善の事業に二つあってはならない」と述べた。

### 4)「事務は迅速性を欠いてはならない」

日本赤十字社は三陸津波以前の災害においては、救護員に事務員あるいは会計員を同行させた。しかし事務において些細なことに拘泥すると、救護の迅速性を損ないかねない。三陸津波においては初めての試みとして事務員が派遣されなかった。記録資料のなかにその評価はないが、事務作業を迅速に、ときには簡潔に行うことも重要と考えられていた。

### 5)「地方医士に花をもたせよ」

もともとは1891(明治24)年濃尾地震で出張した救護員への日本赤十字社病院長橋本綱常による訓示である。大森医長はこの訓示を引用しながら、現地の開業医に功績をあげさせる必要性を説明した。

当時は漢方医、蘭医、西洋医などが混在した時代であり、これに加えて岩手県の沿海部は医療に関して立ち遅れていた。災害により現地医療も大きな被害を受けたのであり、したがって初期医療が不十分であったり、混乱が生じたりしたのはやむを得なかった。現地を訪れた派遣医たちから見れば、現地の初期医療は不十分であっただろうが、それによって地方医の評価を下げ

てしまっては、以後、地元の住民の医療を担っていかねばならない地方医にとって不利な条件となる。

この三陸津波でも、釜石・盛地方では軍医の到着により以前よりもしっかりとした救護体制をつくることができたが、結局、主客の区別が曖昧となり、そのため軍医が引揚げる間際になっても、現地医療を誰がどのように担うかが定まらなかった。山上医員の派遣の目的は、現地医療が手薄にならないようにというよりは、むしろこの善後策の取りまとめのためにあったと考えられる。宮古で大森医員が行ったと同じように、地方の医士や篤志の看護婦を、日本赤十字社岩手支部の嘱託として雇うよう知事にかけあい、その一方で救護に従事させ、それをもって見習い期間とし、引揚げ後の現地医療を担わせる手はずを整えた。

### 6)「看護婦はワザモノと存知候」

本社は機会があれば、養成した看護婦を実地に応用したいという考えをもっていた。しかし三陸津波においては、道が険悪であるという理由で、岩手県から看護婦の派遣が謝絶された。大森医員は「県官の眼中には歌舞伎看護婦はあっても、賄場火事当時の看護婦は想像なきことに思う」と、一般に看護婦の働きが理解されていない現実を嘆き、本社も大森に向けて「今回のような場合に看護婦を使用しなければ、将来一般における看護婦にも影響が及ぶ。なるべく派遣の運びとなるよう、岩手県知事には愛知岐阜震災のときに看護婦の使用は実験していると伝えよ」と述べた。

確かに知事が心配するとおりに盛岡から宮古までの道は大変険悪であり、28里中6里以外はすべて徒歩で向かうしかない状況だった。またちょうど県属と車夫が谷底に転落して、大怪我を負っている場面にも遭遇した。大森医員は看護婦の派遣を迷ったが、宮古に着いて救護にはやはり看護婦の働きが必要と考え、県官と知事を説得し、看護婦派遣の承認を得た。

本社には看護婦はなるべく丈夫な者を派遣してほしいと伝え、宮古には赤十字社員も多いことであるし、できるだけ看護婦たちの働きを見せてやりたい、そうすれば「看護婦ガワザモノト存知候」と述べた。

日清戦争において篤志看護婦の働きが注目されたことにより、女性であっても国家の役に立つことができるという点において女性のイメージは大きく変化した。しかしそこで強調されたのは女性のもつ優しさ、親切さそして忍耐づよさなどの特質のみであって、技術をもった専門職という側面ではなかった。

その他、日本赤十字社の災害救護では、機械材料がスムーズに現地に到着しない問題が頻回に起こること、また赤十字の標章を戦時以外に用いて良いかという問題が提起された。

## おわりに

三陸津波における岩手県の医療救護の特徴は、被害が甚大かつ広範であること、もともとの医療資源が少なく、それらも壊滅的な被害を受けたこと、これに加えて通信が途絶、被災地への交通の不便さから、県外から出張してきた救護員も迅速な行動が困難であったことがあげられる。そのなかで日本赤十字社本社は他の救護団体よりも早く現地に駆けつけ、宮古地方以北の不便な地を担当した。最も早かった宮古地方での救護開始は6月19日、すなわち津波発生後4日目であり、災害による通信の途絶、当時のこの地方の交通の不便さを考慮するとその迅速性は評価されてよい。

負傷者は、津波に飲まれ、流失した木材や海岸の岩などに打ちつけられ、外傷を負い、あるいは溺水により胃腸炎や嚥下性肺炎を併発していた。建物が流失したために適切な治療所がないこと、使役者の不在、井戸水の汚染、滋養物の不足に加え、方言で言葉が通じないことなどにより、救護は困難を極めた。住民の側

も当初、軍医や日本赤十字社などの西洋医学による治療を恐れ、負傷者を匿うなどの場面もあったが、やがて警察や官吏による説得が行われ、治療が確かであることを知ると、住民の方から相談に訪れるようになった。これらは1891(明治24)年の濃尾震災と類似する特徴である。

日本赤十字社による当初の方針、すなわち派出所を各地に設け、中心となる病院に重傷者を集めて治療する方針は、宮古地方ではほぼ実現されたが、久慈地方では実現できなかった。住民が西洋医学に馴染みがないう、交通が不便であることだけが要因ではなく、負傷者にとっては治療も大事だが、生活の再建もまた重大な問題であり、生活の場である被災地を離れることに抵抗があったことも要因ではないかと考える。

岩手県沿岸の各地方によって救護の体制は異なった。久慈地方は不便な地ではあったが、私立久慈病院、私立宇部病院などが活動しており、いくらかの医療資源が存在していた。一方、盛地方、釜石地方は大勢の医療者が出張、派遣された地であり、現地の医員と派出医員の協力関係に困難が生じた。日本赤十字社では、宮古地方に出張した大森医員、7月になって盛地方、釜石地方に出張した山上医員が、現地の医療者を岩手支部の雇用とし、救護に参加させ、見習い期間とし、その後の医療を担わせて、これら現地の医療者たちが徐々に生計を立てられるように支援した。この方法は、1891(明治24)年の濃尾震災でも採られたが、それに加えてこの災害では新たに、教育を受けた看護婦たちが、現地の篤志の女性たちに対して教育を行ったことが特徴といえる。

西洋医学を修めた医員たちは、ただ治療を行って去るのではなく、患者を適切な環境で療養させ、治療の経過を記録に残し、経緯を見届けることまでを適正な医療として理解した。日本赤十字社はそれに加えて、

適正な医療を現地の医療関係者に引継ぎ、彼らの自立を見届けるまでを救護とした。

なお、日本赤十字社における看護婦長（看護管理者）は、病院管理のためではなく、戦時および災害時の管理のために必要とされ、始まった。看護婦長は日清戦争の折に始めて設けられ、明治三陸津波以降、戦時・災害救護の両方で常置された。その役割は1900（明治33）年の義和団の乱では「看護の指揮者となり常に看護上に注視し時としては患者の状況により自ら率先して之を看護することありと雖も多くは部下を督励してこれに当たらしめ且一方で物品の出納保管帳簿の記載などに関し陸軍看護長の任務を補助せり」と定義されている。なお日本赤十字社で看護婦長の養成が開始されるのは1907（明治40）年である。

またこの災害では、日本赤十字社の看護人が始めて災害救護活動に参加した。岩手県には、日本赤十字社の看護人28名の他、第二師団及び陸軍軍医学会の看護長・看病人総勢44名、地方篤志者の看護人6名が救護に参加した。当時、軍隊では看護長、看護手、看病人という序列及び職域があり、日本赤十字社では看護人伍長、看護人がいた。三陸海嘯では殊更不便な地であることから日本赤十字社から男性の看護人が派遣されたと考えられる。日本赤十字社における看護人の養成は明治30年からであり、三陸海嘯で出張した看護人数がその後の養成所卒業生として名を連ねている。

これら看護婦長、看護婦長心得、看護婦、看護人伍長と看護人という序列、宮古地方に見られるような看護婦と看護人による役割分担などの看護チームの構成と役割分担は被災地における医療活動の潜在能力を効果的に開発するものとなったと考えられる。これらは日本赤十字社病院を卒業したばかりの看護婦によって行われた濃尾震災ではなかったことであり、日清戦争での経験をふまえた看護の組織と機能の発展があった

ものと考えられる。

災害救護団体としての日本赤十字社の地位も、この災害においてある程度確立したといえる。宮城県では県で行われた医療救護が日本赤十字社宮城支部の事業として総括されたこと、宮城県では第二師団の軍医も赤十字の補助として活動していると述べたことがあげられる。また日本赤十字社も以前の災害の場合と異なり、宮内省の要請を待たずに救護員派遣を決定し、事後に同省に報告を行うなど、宮内省の事業の一環というよりは災害医療団体としての自覚のもとに活動した。また濃尾震災と同じく、他県の日本赤十字社支部からの救護員の派遣も行われた。

この災害を通じて、日本赤十字社の災害救護の活動方針は明らかになっていったが、それらは今日にも受け継がれている<sup>51)</sup>。一方、それらの活動を支える組織はこの段階ではまだ十分には発展していなかった。当時、看護婦養成は一部の支部でしか開始されておらず、戦時や災害時には地方の医員や看護婦を雇い入れて、赤十字社の医員、看護婦として活動させる方法がとられた。現在のように、各支部に日本赤十字社病院が設置され、救護員としての看護婦が養成されるようになり、民間医療をも担うようになるにはしばらく年月を経る必要がある。

## 謝辞

本研究に際してご指導下さいました國學院大學上山和雄教授、元日本赤十字看護大学司書吉川龍子先生、また貴重な資料や情報をご提供下さいました岩手県庁総務部、宮内庁書陵部の方々に心より御礼申し上げます。



## 引用・注

- 1) 日本赤十字社『社史稿』明治40年。明治25年4月社則第4条の改定。なお社則とは別に、災害救護に関する規定が設けられるのは、8年後、明治33年天災救護規則の制定による。
- 2) 黒沢文貴編『日本赤十字社と人道援助』東京大学出版会、2009年。
- 3) 災害教訓の継承に関する専門調査会報告書「1888磐梯山噴火」平成17年3月。
- 4) 災害教訓の継承に関する専門調査会報告書「1891濃尾地震」平成18年3月。
- 5) 川原由佳里、1888(明治21)年磐梯山噴火における日本赤十字社の救護活動、日本看護歴史学会誌(23) 79-91頁、2010年。
- 6) 川原由佳里、明治23年トルコ軍艦事故における日本赤十字社の活動、日本看護歴史学会誌(22) 44-57頁、2009年。
- 7) 川原由佳里、1891(明治24)濃尾地震における日本赤十字社の災害救護活動：岐阜県出張医員の記録史料から、日本看護歴史学会誌(21) 46-55頁、2008年。
- 8) 川原由佳里、明治24年濃尾震災における医療救護—岐阜県における日本赤十字社の活動に焦点をあてて—、アリーナ第9号、55-72頁、2010年。
- 9) 細越幸子、明治三陸津波の仮設治療所における看護活動、日本看護科学学会学術集会講演集、410頁、2009年11月。
- 10) 公文雑纂 内務省四 第17巻 明治29年 国立公文書館所蔵。内務省県治局作成明治二十九年六月十五日海嘯被害表及び日本赤十字社書類綴『三陸海嘯救護書類明治29年至32年共六ノ一』博物館明治村所蔵。
- 11) 日本赤十字社書類綴『三陸海嘯救護書類明治二十九年岩手上共六ノ三』第二号岩手県派出宮古方面第二回救護報告書大森医長心得提出、明治29年7月10日付、博物館明治村所蔵。
- 12) 東北方面は、東京・青森間の電信線が明治8年4月に完成。岩手県の沿岸部は明治29年にはほとんど電信局が設置されていた。青森には古間木に電話があったが、岩手県では明治41年から電話が開通。『岩手県史』第10巻近代編 第5、229-322頁、1965年。
- 13) 公文雑纂 内務省二第15巻 明治29年 国立公文書館所蔵。6月16日午後6時発岩手県知事発内務省宛電報「昨日午後8時30分より南九戸郡久慈港にて地震海嘯あり。家屋百余流失畜死傷少なからず又南閉伊大槌にても家屋数百数十戸流失、溺死者数十名ありとの報あり委細取調中」。
- 14) 同上13) 17日午前8時50分岩手県知事発内務省宛電報「15日午後8時30分前後大海嘯の為気仙郡盛町死傷者二千人余り、南閉伊郡釜石町残らず流失、大槌町は幾部残すのみ其近傍大槌が流失、東閉伊郡郡山田町及び鉾ヶ崎等も同じく流亡死傷者おびただし、南九戸郡久慈港も百余流失、人畜死傷少なからず電信いづれも不通只今迄報知によれば沿海は残らず大害を被りたるものと思料す夫々救護及び取調の為め吏員派遣中なり不取敢具申す」。
- 15) 恩賜録 総務課 明治29年 宮内庁書陵部所蔵。
- 16) 官省達・訓令綴 官房文書 明治29年 岩手県永年保存文書。訓第四二八號海嘯災害救済金支出二付救助方、内務省、明治29年7月11日。
- 17) 中央防災会議報告書『1896明治三陸津波』58頁『巖手公報』より抜粋作成。
- 18) 災害関係資料整備調査委員会編『岩手県災害関係行政資料Ⅰ』1984年。各地に派遣された県属・警部の総数は33名。巡査は113名。県属は県の役人のこと。
- 19) 『岩手公報』7月29日被害地郡長の召集。
- 20) 臨時縣会書類綴 第一課庶務 明治29年 岩手県永年保存文書。明治29年6月18日決議第44号海嘯後衛生上ノ注意。同決議は6月19日に告諭第5号(明治二十九年訓令、訓號、訓示、告諭、正誤 岩手県永年保存文書)として発せられ、『岩手公報』6月20日に掲載された。その後3回の告諭は第6号6月27日(岩手公報には6月30日掲載)、第7号7月24日(岩手公報7月26日掲載)、第9号8月15日と号及び発行月日が附されており、岩手県永年保存文書および国立国会図書館の所蔵のマイクロフィルムで確認できる。
- 21) 岩手県公文類纂 官房文書、明治21年 岩手県永年保存文書。ならびに『岩手県史』第10巻近代編第5 561頁。府県立医学校費の地方税による支弁を禁止するもの。勅令とは、明治憲法下において、天皇によって制定された命令(法形式の一つ)の総称。天皇は内閣を補弼する立場で地方税による医学校費支弁の禁止を命じた。
- 22) 岩手県統計書 明治24年 国立国会図書館所蔵。岩手県公文類纂 第一課庶務、明治29年岩手県永年保存文書より明治28年7月1日衛生費補助法。ならびに國本恵吉『岩手の医学通史』263-277頁、1987年。日本赤十字社書類綴には、三陸津波で救護に携わった現地の医療者のなかに、元岩手医学校教諭千葉求の名前を見ることができる。
- 23) 岩手県医師会史編纂委員会編『岩手県医師会史上巻』国立国会図書館所蔵、54-56頁、1980年。
- 24) 日本赤十字社『社史稿』明治40年。委員部の長を兼任する知事には「委員長」という呼称が用いられていたが、支部・委員部いづれも府県の群部に委員をおいていたことから混同を避けるため、明治26年に「委員長」は「委員部総長」と改称された。明治29年6月海嘯発生当時、岩手県知事は岩手委員部総長であった。なお明治28年の時点で看護婦を養成していたのは30のうち7の支部のみだった。
- 25) 日本赤十字社宮城支部『日本赤十字社宮城支部海嘯救護記録』明治31年3月 国立国会図書館所蔵。明治29年8月21日付勝間田より日本赤十字社宛感謝状より。
- 26) 日本赤十字社書類綴『三陸海嘯救護書類明治二十九年共六ノ一』、『同六ノ五』明治29年。「昨年ノ海嘯救護事業は地方庁ニ於テ之ヲ統括シ支部ハ之を補助シタル事実ニ有之」博物館明治村所蔵。
- 27) 『萬朝報』7月4日臨時釜石病院、『萬朝報』6月30日大海嘯(南部十一報)、『自由新聞』7月9日気仙特信、いづれも東京大学地震研究所所蔵、新聞切抜帳より。
- 28) 日本赤十字社録 皇后宮職 明治29年、宮内庁書陵部所蔵。第一三三三陸嘯害患者救護報告略。
- 29) 日本赤十字社宮城支部『日本赤十字社宮城支部海嘯救護記録』1898年。負傷者救護費には、近辺の開業医に日本赤十字社岩手支部(委員部)救護員の名を与え、活動をさせる等の臨時採用者の活動経費等々も含まれている。宮城県『宮城県海嘯誌』1903年、215-216頁、国立国会図書館蔵、「(負傷者救護に関して日本赤十字社は)報酬ヲ求ムル意ナキヤ

- 明ナリトス国庫救済金ノ下付アリ以上各費目過不足流用支弁ノ上本費ニ於テ尚千八百円ヲ余スヲ得タルヲ以テ之ヲ該社ニ交付以テ救療ニ用セシ社費ノ幾分ヲ補助セリ」
- 30) 日本赤十字社書類『三陸海嘯救護書類明治29年至32年共六ノ一』明治29年、博物館明治村所蔵。一、三陸海嘯救護誌。日本赤十字社福島支部からの派遣は支部からの申し出を受け、岩手県知事が依頼したもの。
  - 31) 『時事新報』6月28日岩手海嘯雑聞、『東京新聞』6月28日大海嘯後の釜石及び付近の状況（其三）、『萬朝報』6月30日三教員の溺死、東京大学地震研究所所蔵新聞切抜帳より。
  - 32) 陸軍省大日記 肆大日記、明治29年6月 防衛省防衛研究所所蔵。6月18日岩手県知事服部一三は第二師団長乃木希典に軍医派遣を要請。軍隊の災害派遣は明治24年の濃尾地震の折に第三師団、陸軍軍医学会が被災地に軍医を派遣したのが始まり。岩手県永年保存文書、明治29年6月20日～7月16日誌では、最初の第二師団からの軍医・看護人・工兵の派遣は、第二師団からの申し出を受け岩手県が依頼したもの。
  - 33) 『大坂毎日新聞』6月22日。盛町出張の斎城軍医による談話として「第二師団の凱旋日尚浅きを以て永く当地に居る能はず」、『大阪毎日新聞』6月30日惨雨惨風「第二師団より来たれる一等軍医斉城捨之介三等軍医牧野康二両人の他医員5名あり小学校長など赤十字の事業を助けつつあり」など、東京大学地震研究所所蔵新聞切抜帳より。
  - 34) 陸軍省大日記 肆大日記 明治29年9月 海嘯被害地へ派遣者旅費の件 防衛省防衛研究所所蔵。第二師団が20日より前に岩手県に出張した軍医の旅費は115円18銭。6月17日に宮城県知事、6月18日に岩手県知事から軍医等の派遣要請の書類には、軍医等の出張費は県が支弁することが書き添えられている。なお、6月20日以前に出張した軍医計6名の出張費は、第二師団が師団経費から内国旅費として支弁（ただし年度末に不足するときに特別な増額を検討）とすることが9月になって決定された。
  - 35) 『国民新聞』6月25日海嘯と疾病及び軍医の特徴、東京大学地震研究所所蔵。
  - 36) 『臨時増刊風俗画報』第百十八号 明治二十九年七月十日 大海嘯被害録。当時、帝国大学医科大学を卒業した医士のみ医学士と名乗ることができた。1920年大学令から帝国大学以外の大学で学士号を授与可能になった。明治20年代は医士と医師は互換的に用いられていたが、明治31年に医士法案が「医師法案」と名称変更されるが廃案、明治39年に成立、このあたりから医師が正式名称となった。
  - 37) 『自由新聞』7月9日気仙特信、『東京新聞』6月25日、東京大学地震研究所所蔵。
  - 38) 『臨時増刊風俗画報』第百十八号 明治二十九年七月十日 大海嘯被害録。
  - 39) 日本赤十字社書類『三陸海嘯救護書類明治29年至32年共六ノ一』明治29年、博物館明治村所蔵。一、三陸海嘯救護誌。
  - 40) 同上30)第八号岩手縣海嘯被害患者救護ノ実績調査。大森医員6月19日提出の報告書。
  - 41) 日本赤十字社書類『三陸海嘯救護書類明治二十九年岩手上共六ノ三』第一号岩手県派出宮古方面第一回救護報告書大森医長心得提出、7月6日付。
  - 42) 同上41)第八号岩手県東閉伊郡重茂村治療所救護一斑。
  - 43) 同上41)第二号岩手県派出宮古方面第二回救護報告書大森医長心得提出、7月10日付。
  - 44) 『東北日報』6月30日被害者救療報告。『東京日々新聞』7月4日重病者の救療「薬を飲む習慣がないので、薬を破壊しているが、創は痛むのでいやがらずに薬を貼っている」という記事。『萬朝報』7月3日野田村の大惨状、縊帯の儘田圃に入る、医薬を嫌ふ、医師の宿泊を謝絶す、治療所に入らずなど、東京大学地震研究所所蔵。
  - 45) 日本赤十字社書類『三陸海嘯救護書類岩手県下』明治29年、博物館明治村所蔵。第27号岩手県下南九戸郡野田村出張本社医員岡崎秀民からの報告7月8日。
  - 46) 同上41)岩手県派出気仙郡盛町方面第一回報告書山上医等提出。山上医員は濃尾震災でもこのような役割を果たした。
  - 47) 日本赤十字社書類『三陸海嘯救護書類明治二十九年岩手下共六ノ四』明治29年、博物館明治村所蔵。
  - 48) 日本赤十字社書類『三陸海嘯救護書類明治二十九年岩手下共六ノ四』明治29年、博物館明治村所蔵。『日本』7月3日海嘯実記（十四）釜石に向ふ 東京大学地震研究所所蔵。
  - 49) 日本赤十字社『社史稿』1324頁、明治40年。日清戦争では看護婦長（副長あわせて10名）よりも看護婦監督（取締等あわせて22名）の人数が多かったが、日露戦争では看護婦監督は1名にとどまり、看護婦長184名が看護婦の管理の主体となった。
  - 50) 山崎の先行研究でも、明治三陸津波における看護人の救護活動については記載がないので、本稿が初出である。なお濃尾震災の折、岐阜県では県下の看護人が4名、県外の看護人が2名、救護活動に参加した。その他、帝国大学医科大学、府県立医学校などの学生が実質的に看護の役割を担ったと考えられる。陸軍看護人の職域と役割については鈴木紀子氏(2010)衛生隊編制に向けた陸軍看護制度の第二次改革、国史館史学第14号を参照。『岩手公報』6月26日には看護卒2名が大槌に派遣されたという記事もあるが、最終報告書には看護卒は存在しないため記事の誤りと考えられる。
  - 51) 第2回災害看護セミナー日赤DMAT始動一全体構想と取り組み、将来の方向性一資料2010年3月6日開催日本赤十字看護学会災害看護活動委員会資料。